

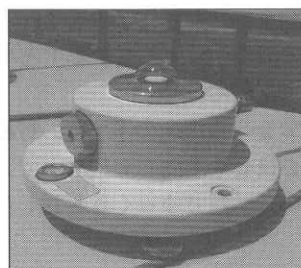
研究は自由な環境で育つ —望まれる男女共同参画の実現—

Liberal Study Environment Produces Valuable Research: Hoping to Realize Gender-Equal Society in Japan

佐々木政子 Masako SASAKI

研究のキーワードは“光”。光化学でスタートし、現在は光生物学、光物理学までをカバーしている。学部生の頃、日本は石油化学全盛時代。石油化学プラント設計に携わりたいと卒業研究で化学工学を専攻しようと考えた。相談に伺った教授は「女の下で働く工場技術者はいない。駄目だね」と。この頃から、女性と男性では、社会の対応が異なると気づかされるが多くなった。卒研は好きな物理化学に決め東京大学生産技術研究所の外部研究生になった。就職では、公務員なら男女平等に違いないと上級公務員試験を受験し、運良く合格後に卒研継続の形で菊池真一教授の光化学・電気化学研究室に入った。菊池教授、後継本多健一教授は、ともにフランス仕込みの研究者で、「研究は自由におやりなさい」がモットーの研究室であった。研究テーマが決まったら、自分で考え、実験・実験、議論を重ね、研究成果を世の中に送り出す。最新装置が日本で真っ先に届き、国内外からの訪問者・研修生も多く、スポーツも盛ん、活気あふれる進取の気風に富んだ研究室で育った。研究テーマとしたフォトポリマーの原型、重クロム酸ゼラチンは、今でいうナノ材料。銀塩では達成不可能だった分子サイズ画像の位相カラーホログラムを実現させた。博士論文の最終段階で、教授の紹介状を手にしてその道の権威を訪ね、自分の研究を2時間程度聞いていただく武者修行を敢行した。先生方からのご質問やご提案は、研究内容の再考と研究の基本を考える好機となった。

東海大学への異動時期は、国際婦人年の始まりの年であった。大学からの初めての出張命令は、京都で開催された国際婦人年日本大会(41団体共催)への出席だった。この会議は、女性研究者が日本に大勢いる、多くの人が研究環境や地位の改善を望んでいると、私に認知させた。これ



この計測器による太陽UV-Bの1990年以降2000年の連続計測・解析結果は、近年の各国におけるUV-B増加傾向とともに2006 WMO/UNEP Ozone Assessmentに日本のデータとして引用された。

以降、日本女性科学者の会の会員として、女性研究者の地位向上に取り組んできた。日本の男女格差は先進国中で突出している。この後進性、男性支配の構図からの脱却は、過去40年来の課題であった。少子高齢化が顕在化する中で、女性の活用を希求する政府がようやく重い腰を上げた。高分子学会員、とくに男性会員は、「202030」というキーワードをご存知だろうか。今年4月内閣府男女参画推進本部は、「女性の参画加速プログラム」を決定した。基本は、1. 仕事と生活の調和(WLB)の実現、2. 女性の能力開発・発揮に対する支援の実現、3. 意識の改革である。さらに、2020年までに指導的地位に女性が占める割合を30%にするという重点対象に、女性医師、女性研究者、女性公務員が指定された。日本の全研究者に占める女性の割合は12.4%に過ぎず、先進34カ国中最下位である。この現状打開には時間がかかる。しかし、いま、女性研究者の働く環境は確実に改善に向かっている。時々、女性だけがなぜ優遇されるのかという不満の声があがる。現在なお、日本の女性研究者は、各国にやっと肩を並べられそうという状況にたどりついた段階である。既成概念にとらわれない柔軟な発想ができる女性研究者の増加は、人材育成でも力を発揮してくれると期待される。男女共同参画が日本に根づくとき、科学技術立国日本は国際社会で飛翔できよう。

学生たちとともに学びつつ、光医学・光生物学・光工学の研究者たちと、人々の幸せにつながる先進的な研究を切り拓いてきたと自負している。



東京理科大学理学部化学科卒、東京大学生産技術研究所文部技官・助手を経て、東海大学情報技術センター専任講師・助教授、同開発技術研究所助教授・教授、同総合科学技術研究所教授を経て、2008年4月から東海大学名誉教授。2001~02年日本光生物学協会会長、2003~07年日本女性科学者の会会長等を歴任。現在、日本化学会、日本光医学・光生物学会等理事、内閣府男女共同参画推進連携会議議員等、東京大学工学博士。専門は生命と環境にかかわる光科学。